

## ○信仰、蛇、十字架—二人の兄弟の殉教○

二ヶ月前から私は新任地のフランスにいる。前任地のチャドの最後の日に起こったことを語りたい。

3年前、首都のンジャメナに着いたとき、我々の小さなバチカン大使館にたった一つしかなかったパソコンの修理のため技術者を探していると、コンピューター工学の学生で25歳の青年を紹介された。私がチャドにいた間、彼とはプログラムやウイルス対策の問題を相談するために何度か会って話すことがあった。数ヶ月前、この青年からメールを受け取った。その中には「イスラム教徒がカトリックになること、よい信者になることは可能ですか」という質問があった。その後の経過を簡単にまとめると、彼はカトリックを信じるようになり、志願者になるために準備を始めた。あるとき、この点について話し、彼に十字架を贈り、十字架とは何かを説明した。

チャドでは、様々な宗教の関係は普通は良好であるが、イスラム教徒の改宗はまれである。この青年はあるイスラム教の部族に属しているため、親族の間ではかなり慎重に振舞った。両親はすでに他界し、18歳の妹がいたが、彼女も兄がカトリックになることに賛成していた。

イスラム教徒が昼の間の厳しい断食の後で、毎晩家族でお祝いをするラマダーン月になったとき、青年は妹にこの期間ふるさとにかえって親族と一緒に過ごすように勧めた。彼自身は首都に残って仕事と勉強を続けることにして。

田舎に帰った妹は叔母と親しく話しているうちに、兄がカトリックに改宗しようとしていることと、もし教会が認めてくれるなら自分も洗礼を受けようと考えていると打ち明けた。叔母はその話に腹を立て、他の親族にも伝えた。一族は、怒りに燃えて、彼女に部屋に毒蛇を投げ込み、彼女はそれにかまれた。少女は、何日ももだえ苦しみ、周囲に医者連れて行ってくれと頼んだが、無視され、命を落とした。その後、親族は青年に、その子細を隠して、妹が死んだことと葬式があるので帰ってくるように伝えた。

村に着くと、青年は何か変だと気がついた。親族は彼と話すのを避けるのである。そこで幼友達を訪ねると、彼は真実を語ってくれ、青年が呼び出されたのは「もう一つの葬式をするため」であることを告げた。その通り、夜になると数人の親族が斧を手にして青年の部屋に入ってきた。すでにそのことを予測していた青年は間一髪窓から逃げおおせた。様々なハプニングの末、ようやく首都に戻って来ることができたが、その町にも一族の人間が住んでいることから決して安心できなかった。そのため事態が沈静化するまで、隣国のカメルーンに移住しようと決意した。

国境を越える前に私に挨拶に来てくれた。袋を二つしか持っていなかったが、その中に家から慌てて持ち出した全財産が入っていた。一つの袋には衣類。もう一つには聖書、要理の本、簡単な祈祷書。この青年の信仰に胸を打たれ、もし自分が同じような状況に置かれたら、どういう選択をするだろうかと自問した。

彼が首に十字架を下げていることを見つけて、大いに驚いた。それはかつて私が彼に贈ったものであった。私は彼がそれを使っていることを見て深く喜んだが、彼がイスラム教の部族に属していることはすぐにわかるという状況から、それは危険ではないかと注意せざるを得なかった。青年はこう答えた。「自分はまだ洗礼を受けていませんが、十字架はもし私が殺されたとき、私のために二つの重要なことをしてくれます。一つは、私の死体を見つけた人は私をキリスト教徒として埋葬してくれること。もう一つは、自分が十字架の説明を聞いたときに理解したこと、すなわち『私のために先に死んでくださった神のために』自分は死んだことがはっきりすることで、それがとてもうれしいのです」と。

Rubén Darío Ruiz Mainardi

2013年11月



チャド共和国

人口：1200万（2010年）

宗教：イスラム（54%）、カトリック（20%）、  
プロテスタント（14%）

1960年、独立（～60年、フランス領）

カメルーン共和国

人口：2050万（2012年）

宗教：キリスト教（70%）、イスラム教（20%）